



一般社団法人 日本LD学会  
Japan Academy of Learning Disabilities

# 会 報 第107号

事務局

〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイヤビル 8F  
TEL 03-6721-6840 URL <http://www.jald.or.jp>



## 主な記事

- ・いよいよはじまるLD-SKAIP事業
- ・英国ディスレクシア協会（BDA）第11回国際会議に参加して
- ・＜連続講座＞各地の発達障害者支援センターの取り組みPart II
- ・＜連続講座＞将来の自立を目指した、ライフステージを通じた支援
- ・被災地支援委員会の取り組み
- ・PATIO～実践の最前線～



## 新学習指導要領時代の 学びの主語は誰か

愛媛大学

吉 松 靖 文

特殊教育から特別支援教育にかわり、10年が過ぎ、障害者差別解消法成立・施行、障害者の権利条約批准、発達障害者支援法改正を経て、特別な教育的ニーズのある子どもたちへの理解と支援が充実してきました。今年度は、小・中学校に加え高校でも通級による指導が制度化されました。

幼稚園や保育園でも、スケジュールや構造化のアイデアを取り入れた保育、感覚運動面の発達を促す保育が当たり前のように行われるようになってきています。発達障害を含む障害がある子どもたちが障害がないとされる子どもたちと共に過ごすだけでなく、お互いが相互作用し合いながら共に成長し合うインクルーシブな保育ができていく園も増えてきています。

学校でも、通常の学級で、タブレットのカメラを使って板書を撮影したり、読み上げ機能を使って文章を耳と目で読んだり、授業を録音・録画したりする子どもたちも徐々にではありますが、増えてつあります。

個々の特性に合わせた指導・支援が先生たちにとっても身近なものになってきていると感じま

す。以前であれば、「他の子どもへの影響があるので」といった理由で個々の特性に応じた教材やツールを使ってもらえない・使わせてもらえないことがよくありました。

支援の充実と共に気になる行動が減少し、学習が改善し自信を持って学べる子どもが増えてきたことはとても喜ばしいことです。そんな支援が充実してきた時代だからこそ思うのは、学びの主語は誰かということです。学校現場では子どもの気になる行動が収まると、保護者が学習など子どもの気になることを相談しても、「大丈夫ですよ」「問題ありません」と言われて相談にならなかった話を未だによく聞きます。新学習指導要領では、「学びに向かう力」など子どもが学びの主体であり、教育や支援は子どもの能力を可能な最大限度まで発達させることを謳っています。支援が充実してきた時代だからこそ、子どもと共に支援の意味や目標を考え、その達成のための方法としての支援の内容を合意形成し、その成果を評価することで、学びの主体者、ひいては人生を主体的に生きる力を育みたいものですね。